

肩書を越えて、未来を話す。

5年前の参加者だった私が、5期目のPROJECT anyで見たもの

株式会社OVER20 & Company. 菅谷千尋



第8回 PROJECT any ミートアップ

企画をほとんど入れず、自由に話す時間を中心にした今回のミートアップ。

それでも会話は途切れず、多くの方が退館時間近くまで残っていました。

5年前、参加者だった私には、その景色が**PROJECT any**の変化と、変わらないものの両方を映しているように見えました。

5年前、私は自分のことを話すのが得意ではありませんでした

私がPROJECT anyに興味を持ったのは学生の頃です。もともと教育に関心があり、特にEQや、自分自身について考えることに興味がありました。

「自分は何が好きなのか」「何に心が動くのか」「これからどう生きたいのか」。そうしたことを考えることに惹かれて、PROJECT anyに参加しました。

ただ、当時の私は、人とのコミュニケーションに今よりも抵抗がありました。「私が自分の話をしてもいいのだろうか」「自分のことばかり話すのは、おこがましいのではないか」と思うこともあり、初対面の人に自分の価値観を話すことも得意ではありませんでした。

PROJECT anyで、メンターワークアウトなどを通じて自分について考え、自分が大切にしていることを言葉にする経験を重ねる中で、少しずつその感覚は変わっていきました。価値観は、誰かに正解・不正解を決めてもらうものではない。そう思えるようになったことも、自分にとって大きな変化でした。

参加者から、運営する側へ

PROJECT anyへの参加後、私はOVER20 & Company.でインターンを始めました。Instagram運用、イベントでの登壇、LinkedInを通じた社会人との対話など、それまでの自分なら選ばなかったようなことにも挑戦しました。

インターンを始めて数か月した頃には、OVER20 & Company.への入社を希望するようになっていました。当時、明確に「この職種に就きたい」と決めていたわけではありません。ただ、自分が本当に必要だと思えることを、仕事として考え続けたいと思っていました。

その後入社し、個人エニーマイトとの関係づくり、企業とのプロジェクト、営業、レポート制作、ミートアップの運営など、立場を変えながらPROJECT anyに関わってきました。そして今回、5期目を迎えたPROJECT anyを、改めて運営側から見ることになりました。

企画がなくても、会話は終わらなかった

今回のミートアップでは、これまでのようなトークセッションや企画を大きく減らし、エニーマイトやエニーマイトの紹介以外は、ほとんど自由に話す時間にしました。これまでの参加者の声を振り返ると、特に満足度が高かったのが「交流」の時間だったからです。

世代も、仕事も、立場も違う人たちが集まる中で、これだけシンプルな形で本当に場が成立するのか。運営する側として少し不安もありました。

けれど当日は、会話が途切れることがほとんどありませんでした。終了時間を迎えても、多くの方が退館時間近くまで残り、話し続けていました。

初めて参加してくださった方からも、実際にその場で話したことで、資料や説明だけでは見えなかった部分がクリアになったという感想をいただきました。PROJECT anyは、実際に人と人が会って話すことで初めて伝わる部分があるのだと、改めて感じました。



交流を中心にした会場の様子

「お話、聞かせてください」と、エニー生から動いていく

今回、5年前と比べて特に印象に残ったのは、エニー生の積極性でした。社会人から若者へ話しかけるだけでなく、エニー生の方から「お話、聞かせてください！」とエニーメイトのところへ向かう場面が何度もありました。全体でエニー生を紹介する時間にも、自分から「挨拶したい」と声を上げる人がいました。

「せっかくこの人たちと会えるのだから、この機会を使いたい」。そんな姿勢を感じました。

参加してくださったエニーメイトの方からも、何人ものエニー生が自分から話を聞きに来てくれたことが嬉しかったこと、同時に、一人ひとりが将来について真剣に考え、相談したいと思っていることを感じた、と後日教えていただきました。

「若者を支援する」から、「この人に何ができるだろう」へ

すると、支援する側にも「自分には、この人に何ができるだろう」という気持ちが生まれる。今回のミートアップでは、支援する／されるという関係だけではなく、実際の対話を通じて、お互いのことを知り、次の関わり方を考える関係へ変わっていく場面を見ることができました。

「ドラえもんは22世紀だったよね」

もう一つ、印象に残っている場面があります。あるエニーマイトが、大勢の前で、自分の好きな「ドラえもん」について話していました。上手にプレゼンするというより、自分が好きなものを、自分の言葉で堂々と話している姿が印象的でした。

「ドラえもんは22世紀だったよね。君たちの中には、22世紀まで生きている人もいるよね」

その話を聞いた個人エニーマイトの方から出た言葉です。若者が自分の好きなことや、やりたい未来を話す。大人がそれを評価するのではなく、その先にある未来と一緒に想像する。とても短いやり取りでしたが、私はこの場面にPROJECT anyらしさが表れているように感じました。

5年間で形は変わっても、残っているもの

5年前と現在では、PROJECT anyの形は大きく変わりました。参加するエニーマイトも、関わる社会人も増え、企業とのプロジェクトも生まれています。今回のミートアップも、企画を多く用意する形から、対話を中心としたシンプルな形に変えました。

それでも会話が途切れず、多くの人が最後まで残っていた。むしろ企画を減らしたことで、PROJECT anyがこれまで積み重ねてきたものが見えたように思います。

私自身、5年前は自分の価値観を人に話すことに抵抗がありました。今では、自分の価値観やPROJECT anyで感じていることを、社会へ伝えようとしています。そして今回のミートアップでは、多くの人が肩書を越えて、自分の価値観や未来について話していました。

自分の言葉で自分を話す。相手が何を考えているのかを知ろうとする。そして、そこから一緒に未来を考える。

形は変わっても、これはPROJECT anyの中で変わらず大切にされてきたものなのだと思います。

この対話を、社会へどう広げられるだろう

今回のミートアップを見ながら、これは若者だけの話ではないとも感じました。企業の中でも、年齢や役職が違う人同士が働いています。一方で、「自分は本当はどう考えているのか」「相手は何を大切にしているのか」まで話す機会は、意外と多くないのかもしれない。

若い世代を理解することも、大人の経験を若者へ伝えることも、一方向だけではなく、互いに相手を知ろうとするところから始まる。今回のミートアップで起きていた対話を見ながら、私はその価値を改めて感じました。

皆さんの会社には、世代や肩書を越えて、自分の価値観や未来について話せる時間がありますか。